

■ 試験研究課題 事前評価結果（令和6年度開始課題）

判定基準 A：実施妥当、B：内容に改善が必要、C：実施不適當

機関名：上場営農センター

課題名	研究目的・目標	期待される成果	研究期間	総合判定
上場地域におけるタマネギの収穫から出荷調製までの機械化体系の確立	<p>タマネギの栽培面積拡大及び販売額増加のために収穫から出荷調製までの機械化体系を確立する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 作業時間を慣行から 60%削減 ・ 作付面積 3ha/戸→4.5ha/戸（1.5倍） ・ 上場地域における機械化マニュアル作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 畑地における機械化体系の確立により、栽培面積拡大及び所得向上につながる。 ・ 一斉収穫技術の確立により、単価、反収及び作付面積が増加する。 ・ 生産者の所得向上により、担い手の確保と産地拡大に貢献する。 	令和6 ～ 9年度	A

課題名	研究目的・目標	期待される成果	研究期間	総合判定
園芸産出額向上に寄与できる収益性の高い県独自品種の開発	<p>ナスでは、新品種「佐賀 N4 号」の栽培技術を確認する。</p> <p>イチゴでは、集積した有用遺伝子の固定化及び組み合わせ能力検定を実施し、種子繁殖型イチゴ品種を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ナス「佐賀 N4 号」の栽培技術の確立による「PC 筑陽」対比 50%増収及び上物率 10%増加 ・ イチゴ品種「かおり野」と同程度の炭疽病抵抗性や四季成り性を有する母本の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ナスでは、新品種を導入することで、生産者の所得向上や、新規参入の増加などによる生産額の向上につながる。 ・ イチゴでは、さまざまな有用遺伝子を集積した母本を育成することで、多様なニーズに対応したイチゴ育種に役立てることができる。 ・ 種子繁殖型イチゴ品種の育成は、育苗や農薬散布に係る労力を軽減でき、新規就農や規模拡大の促進につながる。 	令和 6 ～ 8 年度	A
佐賀平坦地域におけるタマネギ直播栽培の技術開発	<p>佐賀平坦地域におけるタマネギ直播栽培技術の確立を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ タマネギ直播栽培：出芽率 7 割、収量 6t/10a 	<ul style="list-style-type: none"> ・ タマネギ直播栽培技術を確立・普及させることで省力化を進め、大規模農家増やすことにより、「さが園芸 888 運動」の重要な推進品目であるタマネギ産地の振興につながる。 	令和 6 ～ 10 年度	A
施設回転率の向上による施設切り花の周年生産体系の確立	<p>新規就農者や新規栽培者等の経験が浅い生産者でも取り組みやすい、本県の主要な施設切り花品目を軸に、同一施設当たり年間 3 作の多品目リレー栽培の周年生産体系を確立する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ キク類及びトルコギキョウを軸とした同一施設当たり年間 3 作の多品目リレー栽培の周年生産体系の確立 ・ キク 2 作、トルコギキョウ 1.5 作の場合より販売額 1.4 倍以上増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 経験が浅い生産者でも安定生産出荷が可能な施設切り花の周年生産体系を確立することで、花き新規就農者や新規栽培者の確保並びに新たな花き産地化及び産出額向上につながる。 	令和 6 ～ 9 度	A

課題名	研究目的・目標	・ 期待される成果	研究期間	総合判定
シンテッポウユリ等の夏秋期出荷品目の省力化安定生産技術の確立と新品種育成	<p>シンテッポウユリの省力化・安定生産に向けた栽培技術の確立及び安定生産に寄与する夏秋スプレーギクの新品種育成に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> シンテッポウユリの省力栽培技術の確立 シンテッポウユリの出荷期拡大と品質安定化による販売額 1.4 倍以上増加 安定生産が可能な夏秋スプレーギクの新品種育成 	<ul style="list-style-type: none"> シンテッポウユリの出荷期拡大が図られるとともに、夏秋スプレーギクの新品種導入により、生産者の所得向上につながる。 シンテッポウユリの省力栽培技術の導入により、露地野菜生産者や集落営農組織等での新規栽培が増加し、新たな露地花きの産地化及び花き産出額の向上につながる。 	令和 6 ～ 10 年度	A
中山間地域における「にじのきらめき」湛水直播栽培技術の確立	<p>「にじのきらめき」を用いた湛水直播栽培技術を確立する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 移植栽培と比較して収量 93%以上 移植栽培と玄米品質が同等 移植栽培と比較して労働時間 30%削減 	<ul style="list-style-type: none"> 育苗が省力化され、兼業農家でも米づくりが継続でき、農地の維持が図られる。 直播栽培技術の導入により、水稻栽培が省力化され、園芸品目等を栽培するための労力を確保でき、所得向上につながる。 	令和 6 ～ 8 年度	A
ドローン生育診断・可変施肥によるキャベツ等の生育均一化システムの開発・実証	<p>ドローンセンシングで生育診断を行い、生育状況に応じた可変施肥による生育の均一化に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> 可変施肥による収量 1 割増加及び施肥量削減 	<ul style="list-style-type: none"> キャベツ収穫機の利用により一斉収穫が可能となり、収穫作業の軽労化及び規模拡大が進み、「さが園芸 888 運動」の目標達成に寄与する。 適正施肥により、肥料の費用対効果が高まり、生産コストが削減される。 	令和 6 ～ 8 年度	A
データ駆動型施設園芸に向けた連携システムの開発・実証	<p>開発中の営農支援システムにおいて、民間企業が構築する環境データを自動でアップロードする連携システムの利便性や産地全体での活用面を検証する。</p> <ul style="list-style-type: none"> データ活用による収量 1 割増加 	<ul style="list-style-type: none"> データ活用が進み、高収量農家の技術を分析・共有することにより産地全体の収量向上につながる。 	令和 6 年度	A

機関名：果樹試験場

課題名	研究目的・目標	期待される成果	研究期間	総合判定
次世代を担う県オリジナル日本ナシ新品種の開発	良食味で豊産性の県オリジナル日本ナシ早生品種を育成する。 ・ 良食味で収量 30t/10a を安定して確保できる早生赤ナシ品種の育成	・ 県オリジナル早生赤ナシ品種を開発・普及することで、早生産地としての佐賀県産梨ブランドのイメージを維持しつつ、収量を確保できるため、生産者の所得向上につながる。 ・ 佐賀県産梨の新たな魅力を県内外に発信することで、新たな顧客や新規就農者を獲得するための起爆剤としての役割を期待でき、将来の産地維持や活性化につながる。	令和6 ～ 15年度	A

機関名：畜産試験場

課題名	研究目的・目標	期待される成果	研究期間	総合判定
低コスト化を目指した子牛・繁殖牛向けTMRの生産及び給与技術の確立	<p>県内産の自給粗飼料や未利用資源を活用し、低コストかつ子牛の発育や母牛の繁殖性に影響のないTMRの生産技術と給与技術を確立する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 子牛及び繁殖牛で飼料コスト2割低減 9か月齢時点での子牛の発育が慣行給与と同程度（体重：308.5kg、体高：115.6cm） 分娩後初回種付け日数が慣行給与と同程度（50.9日） 	<ul style="list-style-type: none"> 低コストかつ慣行給与法と同等の子牛生産が可能となり、繁殖及び一貫経営農家において経営安定化が図られる。 	令和6～9年度	A
現場導入に即した経膈採卵プログラムの検討	<p>経膈採卵（OPU）にかかる処置や実施回数・間隔が供卵牛へ及ぼす影響を調査し、継続性のある採卵方法及び通常繁殖周期内への効率的な導入方法の確立を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> 安定した継続採卵及び通常繁殖周期内への導入方法の確立 	<ul style="list-style-type: none"> 酪農家においてホルスタインへの黒毛和種受精卵移植の割合が増えることで、子牛販売収入の増加が見込まれる。 血統優良な受精卵産子が増えることで、子牛単価の上昇が見込まれる。 	令和6～8年度	A
ウシ凍結胚生存性向上技術の検討	<p>経膈採卵-体外受精（OPU-IVF）技術をより効果的に活用するため、体外胚における凍結胚の生存性向上技術を確立する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 体外胚の凍結溶解後の生存性を体内胚と同等（溶解72時間後の生存率：75%） （溶解72時間後の胚盤胞脱出率：63%） 	<ul style="list-style-type: none"> 体外胚の耐凍性が向上により、OPU-IVF技術のより効果的な活用及び優秀な子牛の生産増加が見込まれる。 	令和6～8年度	A

課題名	研究目的・目標	期待される成果	研究期間	総合判定
飼料用昆虫の機能性評価及び利用促進事業	<p>近年新規飼料原料として注目を集めている昆虫タンパク質の機能性評価を行う。また、昆虫タンパク質及び油について、飼料の公定規格への設定及び一般消費者への飼料用昆虫の情報を発信する。これらにより、飼料業界での飼料用昆虫の利用促進を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 家畜への昆虫タンパク質給与試験 ・ 給与試験時又は試験後に得られる血液や糞便、畜産物等の分析 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後安定供給が危ぶまれる、魚粉や大豆粕等の天然資源及び海外に依存している濃厚飼料の含有量を抑えた飼料を国内で製造可能となり、持続性の高い畜産の実現と飼料自給率の向上に貢献できる。 	令和6 ～ 8年度	A